コンサルティング業務の始まり「石狩湾計画」

会社設立の1972年、日本揮発油に勤務の故原田利夫氏から「花畔団地熱供給計画」の相談が舞い込んだ。原田さんは大学の1年後輩で、学生時代はよく一緒に音楽会を愉しんでいたが、特にオペラ「リゴレット」の中のジルダのアリア「慕わしき名」が好きで、そのメロディーを時折、口ずさんでいた。原田さんは、アルジェの現場、ベルギーブルージュで、石油プラントの建設に従事していた。1975年、石狩湾の地域暖房計画のケーススタディは、1次側、温水温度差70度、二次側温度差15度の、ニシゲートパイプを用いた高温水システムである。「トン・マイル」という、石油輸送量と同じような考え方で,「ギガカロリー・マイル」という熱輸送量を指標として、熱輸送効率とコストとの関係を、検討した。高温水による地域暖房計画であったが、

シスカ・ヘネシーでの2000年に完成する、ハーバート大学キャンパスの地域暖房計画で学んだ経験が生きた。その後、しばらくの間、日本揮発油社に当社よりエンジニアを派遣して、空調設計での技術協力を委託された。

印象に残る経験として、将来のエネルギーとしての原子力依存に対して、疑問を抱きながら、東海村の「使用済み核燃料再生処理施設」の工事現場を、原田さんの案内で見学したことである。それは日本揮発油、サンゴバンとのプロジェクトと聞いていたが、そこでは、部屋の室内の壁、床、天井の露出の全ての面がステンレスで仕上げられ、設備配管工事は、模型のモデルを見ながら、1本ずつ慎重に溶接されていたことである。2011年、東日本大震災での福島第一原子力発電所事故という現実に出会い、原子力利用の難しさを思い知ることになっている。

花畔団地地図

原田利夫氏

愛知学院大学歯学部

1981年名古屋大学の柳沢忠先生からお声が掛かって愛知学院大学歯学部基礎教育研究棟新築工事で、名古屋大学柳沢研究室、建築計画連合、丹羽英二建築事務所のチームにPES建築環境設計が設備設計の一員として参加する幸運に恵まれた。

柳沢教授は病院建築の権威であり、先生が団長のアメリカ研修旅行にも2度の同行の機会を得て、直接、学習指導をうけていたが、業務を共に出来ることは、PES にとっては光栄であり、大きな励みになった。設計は大学歯学部という特殊な研究教育機関として、その多岐にわたる学習機能を満足させる設備設計である。構成を大きく分けると講義室、実習室・研究室となっていて、特に研究室系は、理工学、病理学、微生物学、生化学、薬理学、生理学、第一・第二解剖、口腔衛生、動物舎となっていて、特殊給排気、ドラフトチャンバー、特殊排水システム、圧縮空気、吸引システム、純水等など、一般の設備とは異なる特殊設備が主体であった。順次、各研究室の教授先生方と、ヒヤリングして、各々の要求事項を条件として、設備設計を進め、1983年工事着工となった。